被害者の声「けんちゃんの朝顔に交通安全の願いを込めて」

交通事件被害者ご遺族　高田　香氏

高田　香様

私は2016年に交通事故で長男（謙真くん）を亡くしました。事故から５年になります。たくさんの方に支えていただき、このように元気に回復し笑顔で過ごせるようになりました。本日は事故直後の暗い気持ちから変化していったこともお話しいたします。私の話が犯罪被害者のメンタルヘルス回復の一助となれば幸いです。

けんちゃんは背が130センチで体重26キロ、足がすごく長くて、かわいい男の子でした。笑うと右のほおにえくぼのできる子です。大好きな食べ物はかつお節で、おしょうゆもかけないで、よくお皿によそってパクパク食べていた姿を思い出します。お姉ちゃんとは、喧嘩もするけど、仲のいいきょうだいでした。けんちゃんは虫が大好きで、夏になると晴れた日はけんちゃんを自転車に乗せてセミ捕りに行きました。雨の日はカタツムリをいっぱい捕って一緒に楽しんでいました。私はカタツムリがちょっと苦手でしたが、謙真のおかげで触ることもできるようになりました。

こちらが謙真が渡り切れなかった横断歩道の写真になります。距離は5.4メートル、幅４メートル。「青だ」と思って横断歩道を渡ろうとして、右折してきた２トン・トラックにぶつかってしまいました。私は加害者からどう見えたのかと思い、２トン・トラックをお友達に運転してもらい動画を撮影してまいりました。撮っていた時に「けんちゃん、こんな所で亡くなってしまったんだ」と思いました。見通しがいい、どこにでもある交差点で、交通死亡事故は起きてしまうんですね。

今から事故当日からの様子をゆっくり朗読いたします。あの日は曇り空で小雨が降ったりやんだりしていました。いつもの時刻を過ぎても学校から帰ってこないので、少し心配になりました。すると私の携帯電話が鳴り、嫌な予感がしました。電話に出ると、謙真が交通事故に遭い救急車で運ばれていると伝えられました。気が動転しているのと怖いのとで、心臓だけでなく全身にドクドクと鼓動が響き渡りました。見慣れた交差点は通行止めになってパトカーが何台も止まり、警察官が何人もいました。「謙真は大変な事故に遭ったんだ」とすぐにわかりました。その場の警察官に母親であることを伝えると、見知らぬ男が「すみませんでした」と大声で言って頭を下げました。加害者でした。私は病院に行かなければと焦りましたが、混乱していてタクシーが止められないでいました。その姿を見た警察官が車で病院まで送ってくださいました。

搬送先の病院に着くと、謙真は意識が有ったり無かったりの繰り返しでした。私たちは待合室で「どうか息子を助けてあげてください」と神様に祈るしかありませんでした。しかし、事故から７時間後に謙真は息を引き取りました。小さなほおに触れてみると、やわらかくて温かいのです。ただ、名前を呼んでも全く動いてくれませんでした。

数日が経ち、何が何だかわからないうちに葬儀も終わっていました。そのあと急に悲しみがやって来ました。真っ暗闇の中にいるような毎日でした。一番つらかったのは、私がどんなに努力したとしても謙真は帰ってこないという現実でした。

東京地方裁判所で初公判が開かれたのは事故から７カ月後で、２回目の裁判で私は意見陳述しました。判決は過失運転致死罪で禁錮３年、執行猶予４年でした。私は刑の重さは考えないようにしました。加害者に罰を与えても謙真は帰ってこないからです。裁判が終わり、「謙真にしてあげられることが一つなくなってしまった」とさみしいような、何ともいえない気持ちになりました。

「けんちゃんの朝顔 交通安全の朝顔」を始めたきっかけをお話しします。お正月に玄関に飾る鏡餅の下の台の穴に、けんちゃんが朝顔の種を入れるイタズラをしていたんですね。けんちゃんが事故でいなくなり、それを片づけたところ下から朝顔の種が数十粒出てきました。私は思いつくままに、けんちゃんが通っていた小学校の校長先生に「二度とこういうかわいそうな交通事故が起きないように、学校で育てていただけませんか」とお願いしましたら、心よく引き受けてくださいました。今年でもう５年目ですね。新聞に掲載していただいたりして、朝顔を植える学校がどんどん増えていったんです。

朝顔を使って交通安全の講演活動をいろんな所でさせていただいています。３年くらい前は悲しみを訴えるだけの暗い気持ちで講演していました。講演の原稿を書くたびに悲しくなりましたが、書くという作業で気持

ちの整理になったと思うんです。 話し伝えるうちに元気になっていきました。 朝顔というシンボルを見て「交通安全」とすぐわかるといいなと思っています。 けんちゃんが残していったことです。 宮城県や茨城県の高校にも広がり、全国あちこちで朝顔の花が咲くようになりました。

被害者支援都民センターのお話をしたいと思います。 警視庁の犯罪被害者支援室の人から、けんちゃんのお葬式の時にリーフレットをいただいて、 電話したのがきっかけです。 良かったのは犯罪被害の専門的な場所ということで安心して話せたことです。 臨床心理士がいらっしゃいますので、私の話を全く遮らずにひたすら聞いてくださいました。その時分はパニックというか、悲しいのか、怒りなのか、がありました。それが話して伝えなくてはいけないということで整理されていきました。話しては泣いていましたが、臨床心理士が「そうやって気持ちに折り合いをつけられたのですね」とおっしゃいました。その時に「次に行かなくちゃいけないんだな」「けんちゃんはいないので、もうさようならしなくてはいけないんだな」と気づかされました。家に一人でこもっていると同じ考えが堂々巡りで、良くないなと思っていたので、安心して話せる場所があってよかったなと思っています。 また、被害者参加制度を利用して法廷で意見陳述をいたしましたが、陳述書を書くことが自分の気持ちと向き合う作業になりました。

職場では、当時の上司に聞くと「以前と変わらず接しようとお店のスタッフに声をかけた」とおっしゃいました。「休んでしまうのは仕方ないよ」とか「すぐに元気になれないよ」と声をかけていただき、「働けない時は直前に電話をくれればいい」とおっしゃってくださいました。

今も私の知らない形の優しさをいっぱいいただいているのかもしれません。いつも一緒にいてくれたり、時間を共にしてくれたりする人に感謝しなくちゃいけないと思います。私が元気に回復したのは人に会って話をしたからだと思います。話さないとわからないこともありますし、何とか伝えようと思って自分の感情を整理したり字で書いたりすると、自分が思っていることがわかったりします。希望のある言葉を使いたいですし、自分に言い聞かせるのもある、みんなにそう思ってもらいたいというのもあって、明るい文字を見るようになったことも、私が元気になったきっかけだと思います。

皆さんに希望するのは、誰かが困っている時は勇気を出して「私にできることはありませんか」と声をかけ、手を差し伸べてほしいことです。差し出した手をつかんでもらえない時もあると思いますが、もしつかんでくれたなら優しく引っ張り上げてあげればいい。声をかけることも、優しさの形の一つだと思います。不器用な言葉をかけてしまうかもしれませんが、それもその方の優しさで何とか慰めようとしているんだと思います。

私に声をかけてくださる方とか、私を見守り許してくださった方のおかげで、このように元気になりました。講演活動も許していただいている中で活動をしています。たくさん声をかけていただきましたが、この私の遠くまでよく響く声で日本じゅうへお返しする番だと思っています。日本じゅうをカラフルに、交通死亡事故ゼロを目指す活動をしてまいります。 そして、ゆっくり仲間を増やしていきます。

私も犯罪被害者になるなんて思っていませんでした。なってみてわかりましたが、 誰にでも起こり得る身近な問題です。ですから私は特別な存在ではありません。私は犯罪被害者ですけど、私にはできるという希望を持ち続けてまいります。

発行：公益社団法人全国被害者支援ネットワーク